

Japan
Audio
Society

JAS journal

平成 25 年 1 月 1 日発行
通巻 420 号
発行 日本オーディオ協会

2013
Vol.53 No.1

1

○ 年頭ご挨拶 “真（まこと）”こそが新たな道を切り開く 会長 校條 亮治

2012 年「オーディオ・ホームシアター展」より

- ホームシアターの音を 100 倍楽しむ方法
- ホームシアターセミナー（映像）報告
- デジタル時代における真空管の役割
- 「音展の生録イベント」について
- 60 周年記念行事「音の歴史館」を開催して
- 「音のサロン」報告

石井 伸一郎
鴻池 賢三
山崎 順一
岩出 和美
校條 亮治
渡邊 哲純

Member's Plaza

- 無反動スピーカについて

今井 一満

連載『試聴室探訪記』第 15 回

- ～谷口とものり、魅惑のパノラマ写真の世界～ 谷口 とものり・森 芳久
オノ セイゲン主宰 スタジオ「サイデラ・マスタリング」
- スタジオ「サイデラ・マスタリング」のご紹介 オノ セイゲン

JAS インフォメーション

- 12 月度理事会・第 10 回運営会議報告
- 「テープ録音機物語」の著者 阿部 美春さんを偲んで

藤本 正熙



一般社団法人

日本オーディオ協会





(通巻 420 号)

2013 Vol.53 No.1 (1 月号)

発行人：校條 亮治
一般社団法人 日本オーディオ協会
〒101-0045 東京都中央区築地 2-8-9
電話：03-3546-1206 FAX：03-3546-1207
Internet URL
<http://www.jas-audio.or.jp>

C O N T E N T S

- 3 年頭ご挨拶
“真（まこと）”こそが新たな道を切り開く 会長 校條 亮治

2012 年「オーディオ・ホームシアター展」より

- 4 ホームシアターの音を 100 倍楽しむ方法 石井 伸一郎
7 ホームシアターセミナー（映像）報告 鴻池 賢三
10 デジタル時代における真空管の役割 山崎 順一
13 「音展の生録イベント」について 岩出 和美
16 60 周年記念行事「音の歴史館」を開催して 校條 亮治
23 「音のサロン」報告 渡邊 哲純

Member's Plaza

- 29 無反動スピーカについて 今井 一満

- 連載『試聴室探訪記』第 15 回 谷口 ともり・森 芳久
34 ～谷口ともり、魅惑のパノラマ写真の世界～
オノ セイゲン主筆 スタジオ「サイデラ・マスタリング」
36 スタジオ「サイデラ・マスタリング」のご紹介 オノ セイゲン

JAS インフォメーション

- 37 12 月度理事会・第 10 回運営会議報告
38 「テープ録音機物語」の阿部 美春さんを偲んで 藤本 正熙

1 月号をお届けするにあたって

2012 年 12 月 6 日に日本オーディオ協会創立 60 周年記念式典が開催され、会員の皆様には JAS ジャーナル 60 周年記念特別号(全 72 頁、通巻 419 号)と、記念 CD「Trace with Sound The History of Audio」が配布されました。従いまして、本号は通巻 420 号としてお届けします。

本号では、2012 年 10 月 19 日（金）～21 日（日）の「オーディオ・ホームシアター展」で盛況であったセミナーやイベントの内容紹介記事を集めました。

2004 年 7 月号から 2012 年 11 月号まで、連載「テープ録音機物語」を執筆いただいた阿部美春さんが 1 月 2 日に逝去されました。連載は「その 66」をもって完結とさせていただきます。謹んで阿部美春さんのご冥福をお祈り申し上げます。

編集事務局

☆☆☆ 編集委員 ☆☆☆

(委員長) 君塚 雅憲

(委員) 穴澤 健明・伊藤 昭彦 ((株) ディ・アンドエムホールディングス)・稲生 眞 ((株) 永田音響設計)・
大林 國彦・春井 正徳 (パナソニック (株))・川村 克己 (パイオニア (株))・高松 重治 (アキュフェーズ (株))・
濱崎 公男 (日本放送協会)・藤本 正熙・森 芳久・山崎 芳男 (早稲田大学)

年頭ご挨拶



“真（まこと）”こそが新たな道を切り開く

一般社団法人 日本オーディオ協会

会長 校條 亮治

みなさま、明けましておめでとうございます。皆様にとって、年始は如何でしたでしょうか。本当に早いもので東日本大震災から二回目の新年を迎えました。まだ仮住まいの方も多くおられ、心からお見舞いを申し上げます。その日の天候は違っても等しく“陽はまた昇る”新たな年が始まりました。

昨年も一昨年に劣らず、多くの出来事がありました。やはり地球上の営みや仕組みが、大きく歪んでいると言わざるを得ません。自然に比べれば、人間の存在など微々たるものですが、その微々たる人間の、尊大で傲慢すぎることに警告に、目を凝らし、耳を研ぎ澄ます必要があるのではないのでしょうか。また私たち自身が生み出した仕組みにさえ、愛想をつかれる今日です。今一度自然への畏怖の念と、本質に立ち帰る必要があるのではないのでしょうか。

昨年を振り返ってみると、協会にとっては記念すべき年でありました。第一に、創立 60 周年、第二に、CD 発売後 30 周年と云うエポックメイキングな年であり、式典開催と共に記念誌と記念 CD 発行を行い、さらに 50 周年以降の貢献者への顕彰など記念事業を行いました。一方で、鹿井前会長逝去という悲しい現実もありました。私は 60 周年を迎えるに際し、過去の歴史を知らずして、現在も今後も語れるはずがないとの気持ちから先輩諸氏の活動の軌跡をたどってみました。60 年前の設立趣意、そして活動の軌跡を、目を凝らして見ました。その結果見えたことは、諸先輩方の活動は大いに気を吐き「技術は予想以上に進化。しかし、設立主意は未だ健在である。逆に言えば 60 年たっても未だ成し得ず。」思わず大横綱であった双葉山の有名な言葉である「未だ木鶏に及ばず」を思い出してしまいました。先輩方の活動に比べれば、私たちの責任は極めて大です。

そこで今年の抱負ですが、“真（まこと）”の追求こそが新たな道を切り開く！と決めました。広辞苑で「真」を引けば「事実の通りであること、嘘でないこと、真実、本当」とあります。また能楽の「真の花」では「鍛練と工夫とを極めて得た真の花の面白さ」と「風姿花伝」が伝えています。今、社会で起きていることは、この反対ばかりではないのでしょうか。もうそろそろ偽りの世界は終わりにし、人間たるゆえんである、本質を考えることにより、明日を切り開きたいと思います。

音楽・オーディオの世界においては、とりわけ“本物”こそが、明日を切り開く力であると確信し、進む所存です。私は勿論のこと、皆さまにも「真・まこと」の言葉を新年にあたりお贈りし、新年のご挨拶とさせていただきます。今年もよろしくお願いいたします。

2012 年「オーディオ・ホームシアター展」協会セミナーより

ルームチューニングの方法教えます ホームシアターの音を 100 倍楽しむ方法

石井オーディオ研究所
石井 伸一郎

2012 年 11 月 19 日オーディオ・ホームシアター展で行ったセミナーについて報告する。筆者の演題は「ホームシアターの音を 100 倍楽しむ方法」でサブタイトルは「ルームチューニングの秘訣教えます」である。持ち時間は 1 時間 30 分で、パワーポイントの 100 コマ以上の多数の図表や写真を用いた説明を主として行い、最後に筆者が自作したマンションの部屋の 10 分の 1 模型を用いた実験を紹介した。ここでは当日の内容のダイジェスト版を記すことにする。

最初に筆者とオーディオルームの音響特性とのかかわりについて詳しく説明した。筆者は 1957 年から 1994 年までパナソニック株式会社でスピーカーユニットの開発、オーディオアンプの設計、スピーカーシステムの設計、さらにホーム THX の開発を行ってきたが、その間ずっとリスニングルームの音響特性と深くかかわりを持っていたことになる。

出来た製品を色々な部屋で聴く機会を数多く体験したが、再生される音が部屋によって大きく変化することを常感じていた。ある部屋では良い音が出て褒められたのに、違う部屋では良い音が出ずにくさされることがあったが、永年の経験をしているうちにどのような製品でも良い音がする部屋と、どのような製品でも悪い音しか出ない部屋があることが分かってきた。しかし悪い音が出た時に部屋のせいだと言ったところ「良いスピーカーはどんな部屋でも良い音がするはずだ。ストラディバリウスはどこで聴いてもストラディバリウスの音がする。」と云われてからは部屋のことは言わないようにした。

しかし部屋への関心は持ち続けていて、故瀬川冬樹氏の壁面を徹底的に硬い壁にしたリスニングルームの考え方に大きな刺激を受けたあと、従来法で設計した完成したばかりの我が家のリスニングルームの中に立ったときに従来法のリスニングルームの問題点がパツと頭に閃いたのである。その解決法が現在石井式と呼ばれている全帯域を反射する堅い壁と、全帯域を吸音する吸音面の二つで構成するようにした部屋である。実際に造って非常に良い音の部屋が出来たことを確認したので 1980 年の秋音響学会に発表したのがわが国では評価されず、1982 年に米国の AES で発表した論文が、私が知らないうちに 2 冊の建築音響関係の本に紹介され、さらにジョージ・ルーカス監督の造ったスカイウォーカーランチと呼ばれるスタジオに採用されていたのである。ホーム THX の打ち合わせのために訪れた筆者が THX の打ち合わせが済んでスタジオを案内されているときに、初めて石井式の採用した部屋に直面したくだりは受講者に非常に強い印象を与えたように思われた。

しかし定在波の振る舞いなどリスニングルームにはまだまだ分からないことが多かったので定年退職後(1994 年)個人でリスニングルームの研究を始めた。当時はまだパソコンの性能が低

かったためシュミレーションを行うことは不可能だったので我が家のリスニングルームの 10 分の 1 の模型を自作して研究を開始した。初めは伝送特性の測定を行ったが凹凸の激しい特性が何を意味するのか全く分からなかったので、壁の反射の効果を調べるための基礎実験から調べることにした。また正 8 面体の各面にスピーカーを取り付け、これを 8 個に分解できるようにしたキャビネットを製作し鏡像の原理が低い周波数から高い周波数まで全帯域について成り立つことを確認したりした。

さらに部屋の中の伝送特性は部屋の中の定在波によって影響を受けていることが分かったので定在波の研究を徹底的に行い、各モードの波面の動き、音圧分布を解明して定在波の基本的なことはすっかり明らかになった。これらの解説を MJ 誌に 1997 年 6 月号から 2 年間にわたって紹介したところ、栃木県の読者の方からこれから 6 x 4.8m の部屋を造るが天井の高さを何メートルにしたら良いのか質問が寄せられた。

そこで理想の天井高さを求める研究を徹底的に行い、1 : 0.845 : 0.725 の比率の部屋が定在波の分布が最も均一になることがわかった。さらに部屋の最も長い寸法 L を我が家のリスニングルームの寸法の 5.4m として部屋の高さを変えた場合の伝送特性をシミュレーションソフトを用いて求めた。スピーカーは部屋のコーナーに置きマイクは中心線上 10 等分した点に置いた。すると従来ステレオ再生の最適位置とされた範囲では天井の高さが 0.6L 以下では「日本海溝」と名付けた大きな谷ができることが分かった。この谷はこれまでの模型実験の際存在が分かっていたが原因も対策も分からなかったものである。この谷は非常に頑固で吸音材配置などでは全く改善されずただ天井の高さを部屋の前後方向の寸法の約 0.7 倍にしなければならないのである。そして研究を進めるうちに、天井が低い部屋では部屋を横長に使用すれば前後方向の寸法が小さくなるので、かなり改善されることが分かった。わが国の標準の天井高さの 2.4m の部屋の場合は 6 畳間の場合は良いが、10 畳間以上の部屋では日本海溝が発生し、その場合は横長配置にすると特性が大幅に改善されることが明らかになった。

次に石井式の壁面構造について種々の構造と伝送特性の関係の研究を行い現在標準構造としている二重に吸音材を配置した構造にいたる研究の経過の要点を説明した。そしてこれまでに造られた石井式の部屋の写真と伝送特性の例を紹介した。したがって現在では従来にない良い音の部屋を造ることは非常に簡単になったのである。

ところが通常のリビングルームなどをリスニングルームやホームシアターにした場合の音響特性の改善法は非常に難しく、デジタルホームシアター普及委員会発足してからやっと研究を開始したと云っても良い状況である。通常の部屋をホームシアターにする場合まず最初に行うのは残響特性をホームシアターの最適値にすることである。しかし従来の方法の残響設計には複雑な計算が必要で時間がかかったが、デジタルホームシアター普及委員会の音響 WG で作成した音響測定部と音響設計部の二つを融合させたソフト「ZANKYO」を用いれば簡単に短時間で音響設計を行うことが出来るようになった。このソフトは伝送特性と残響測定を行ってさらに残響計算を行えるようになっているので短時間に現状の測定と吸音処理の検討が行えるという非常に優れたソフトである。ただしこのソフトを使いこなすには各種吸音材の吸音特性の傾向についての知識が必要なので床材、壁材、天井材その他主要な各種吸音材の吸音特性について説明を行った。

さらにホームシアターでは各スピーカーからリスナーまでの伝送特性が重要なので 6 畳間から

12 畳間等の伝送特性についての説明を行った。そして天井の低い 12 畳間の縦長配置と横長配置の伝送特性の比較を行い横長配置の優位点、縦長配置の場合の対策についても解説した。

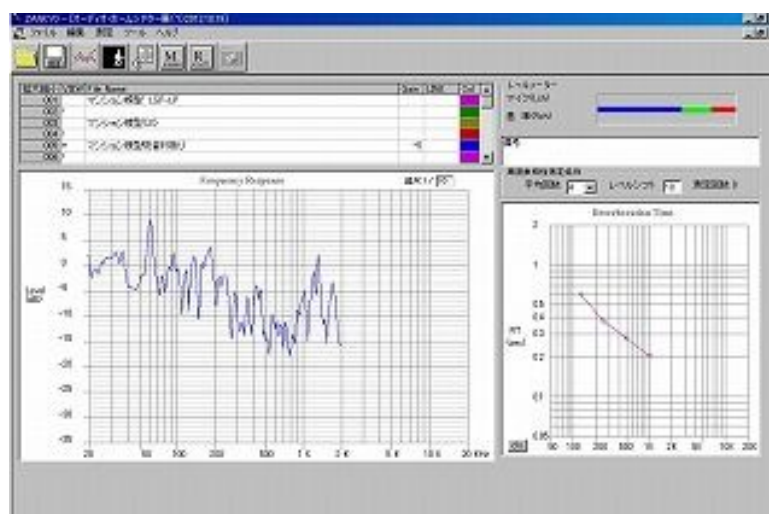
スクリーンを用いた説明が済んでから前方のステージの上でマンションのリビングルームの 10 分の 1 模型を用いて吸音処理前と吸音処理後の残響特性の変化を実演したが、皆熱心に見入っていた。そして部屋の音響特性の重要性を感じ取って頂けたものと思われた。

直方体以外の形の部屋の伝送特性についての情報や、調音パネルの評価の仕方についての資料も準備したが時間の関係で割愛したので、次回また行う際にはこれらについて解説する予定である。今回は第一回なので基礎的な点に重点を置いたので実際の部屋の具体的な改善法に、については僅かしか話せなかったので次回はより具体的な改善法について話すことにしたい。

今回のセミナーを行ってみて部屋の音響特性の重要性を認識されている方がかなり増えているように感じられたが、今後さらに部屋についての情報を提供していく必要があることを認識した次第である。終わってから「非常に貴重なデータを見せて頂いて参考になった。」「今後さらに研究を続けて欲しい」と云った声も聴かれた。



(写真 1) 実演に用いたマンション模型。ガラス窓や襖は開閉して特性変化を測定可能。



(写真 2) 音響特性測定システムと音響設計システムを合体したソフト「ZANKYO」の画面。

2012年「オーディオ・ホームシアター展」協会セミナーより

ホームシアターセミナー(映像)報告デジタルホームシアター普及委員会 映像環境 WG 主査
鴻池 賢三**1. セミナーの方向性と期待する効果**

デジタルホームシアター普及委員会「映像環境 WG」では、ホームシアターユーザーが、制作者の意図に忠実(=高画質)且つ長時間でも快適な視聴が行え、ひいてはホームシアターの魅力アップと普及に繋がるよう、ガイドラインの策定に向けた活動および、JDPC 講座を通じて映像調整技術者の育成に取り組んでいる。

今回のセミナーでは、映像調整のベースとなる「キャリブレーション」の認知度を高めるべく、高画質の定義や調整の必要性など基礎的な情報を発信し、アーリーアダプターへの啓蒙を第一の目標とした。

直近では、アーリーアダプター(マニア)から一般ユーザーへの情報伝搬と、その中から JDPC 講座などを通じた学習を希望するステップアップユーザーの出現を促し、将来的には幅広いエンドユーザーに「良い映像」に対する共通認識の定着と欲求の喚起する事で、映像文化のレベルアップに繋がるものと期待している。

2. 講演の内容

講演では、以下の項目について解説および実演を行った。

- ①高画質とは? ②キャリブレーション(校正)とは? ③キャリブレーションの中身
④好みに合った画作り(映像調整) ⑤キャリブレーション機材紹介 ⑥デモンストレーション
以下、参考までに、各項目の内容を端的に紹介したい:

①高画質とは?

キャリブレーション 基礎講座

3

高画質とは?

Q: どちらが高画質?

A



B



まず会場では、クイズを出題した。聴講者には予備知識を一切与えずに、スライド①を表示し、写真「A」と「B」のどちらが高画質と思うか挙手を募った。

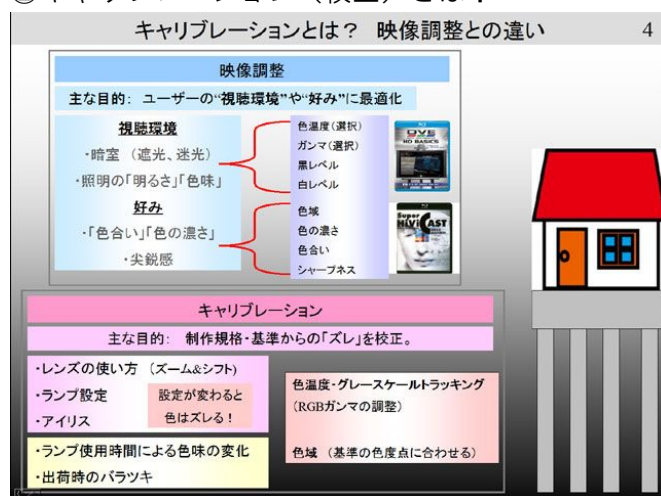
過半数は色の濃い「B」と答えたが、実は引っ掛け問題で、正解は「どちらが高画質かは分からない」である。出題は、聴講者に当事者意識を持たせる意図もあるが、ポイントとして、高画質とは各視聴者が自身の

好みを含めた感覚で決めるべきではなく、「制作者の意図に忠実かどうか」が判断基準である事を伝えるのが狙いである。制作者が見ているであろう映像をエンドユーザーが体験する機会には実質無いので、制作基準に沿った科学的な調整が合理的且つ有効な手段である事を、聴講者にも納得頂けたと思う。

[ポイント]

- ・「高画質」の定義は曖昧である。世界的には「制作者の意図に忠実=高画質」とされている。
- ・制作者の意図を忠実に再現するには、制作基準に沿った科学的な調整が必要。

②キャリブレーション（校正）とは？



日本のユーザー間では、映像機器の「キャリブレーション（校正）」と、色合いや色の濃さなど「視聴者の好みを反映する映像調整」の両者を混同し、「どちらが良いか？」という議論に陥りがちである。そこで今回は、スライド②の通りそれぞれの役割を整理して、「キャリブレーション」の必要性および「好みの映像調整」と矛盾しない事を訴える事にした。また、家に例えると、キャリブレーションは土台、好みの映像調整は建物に該当するという説明で、聴講者の理解が大いに進んだ手応えを得た。

[ポイント]

- ・キャリブレーション > 土台。平らであるべきで、好みが入る余地は無い。
- ・好みの映像調整 > 建物。洋風でも和風でも、屋根が赤でも青でも好みで構わない。
- ・キャリブレーションが出来ていてこそ、好みの映像調整も映える。

③キャリブレーションの中身

聴講者がキャリブレーションについて更に理解が深められるよう、キャリブレーションの対象となる調整項目を示した。特に映像の背骨とも言えるグレースケール（黒→グレー→白の無彩色に色付きが無いのが理想）については、実際にありがちな「調整不備の例」と「正しい例」を実写映像で示し、見え方の違いを解説した。この実写映像は、ここ数年来、各所での講座を通じて改良を重ねて来たものであり、キャリブレーションの必要性を訴えられたと思う。

[ポイント]

- ・キャリブレーションの対象は主に、「グレースケール」と「カラーマネジメント（色域）」
- ・「グレースケール」は、白黒映像だけでなく、カラー映像の色調や立体感にも影響する。

④好みに合った画作り（映像調整）

キャリブレーションとの違いを明確にする目的で、好みの映像調整にも触れた。テレビやプロジェクターメーカーが持つ映像モード（プリセット）と映像調整度合いの関係、例えば、シネマモードは HDTV の制作基準である、色温度 6500K、ガンマ 2.2 に沿っている事が多いなど、傾向を列挙した。

⑤キャリブレーション機材紹介

今回紹介したキャリブレーションを実践するために、どのような機材が必要かを解説した。因みに機材は精度や自動化の度合いによっていくつかのパターンが考えられ、重視する機能や性能と予算で選択する事ができる。最も安価な組み合わせでは測光センサーと PC ソフトウェアの組み合わせで3万円程度から、US のハイエンドインストレーターが使用する最高級のシステムの場合、測光センサーが約 130 万円、測定用パターンジェネレーターが 40 万円、PC ソフトウェアが 30 万円、計 200 万円程度である。

セミナー修了後、聴講者から機材に関する熱心な質問が寄せられ、キャリブレーションに対する興味を喚起できたように感じた。

⑥デモンストレーション

キャリブレーションの必要性を聴講者が「体感」できる事を目的とした。今回は、プロジェクターの設置設定による「狂い」の例として、アパーチャー（レンズに内蔵の絞り）量を設定で一段ずつ変更し、色温度の変化をその場で測定して数値で示した。このデモンストレーションでは、少なく無い変化が数値から読み取れ、聴講者から驚きの声が上がった。一端の例ではあるものの、キャリブレーションの必要性について理解を得るには効果的であったと思う。

3. さいごに ～セミナーを終えて

聴講者の中途退席は少なく、最後に設けた Q&A コーナーでも核心を突いた質問が相次ぎました。今回の目標であった、「アーリーアダプターへの啓蒙」という点では、一定の成果が得られたと考えます。また、セミナー終了後に一部の聴講者が集まり、さらに専門的な質疑を受けるなど、ごく少数ではあるものの、以前からキャリブレーションに興味を持ち、情報を得る機会を待っていたようにも見受けられました。今後も、地道ながら啓蒙活動の継続を起点に、映像文化のレベルアップやホームシアターの普及を目指し、鋭意尽力したいと思います。

さいごに、「オーディオ・ホームシアター展」の中で、貴重な場所と時間を託して頂いた協会、運営関係者、ご足労頂いた聴講者の皆様に感謝の意を表します。ありがとうございました。

筆者プロフィール



鴻池賢三（こうのいけ けんぞう）

オーディオ・ビジュアル評論家。米 Imaging Science Foundation の認定を受け、科学的な観点から、高画質の定義および映像キャリブレーションの啓蒙活動を行っている。

2012年「オーディオ・ホームシアター展」セミナーより

デジタル時代における真空管の役割

株式会社トライオード

代表取締役 山崎 順一

1. 「真空管」その言葉の響きに皆さんは何を想像するでしょうか。

懐古主義？ ビンテージ？ 真空管マニア？ 音が柔らかい？ すぐ壊れる？
いずれもノーです。

私はここで真空管の詳しい歴史とか電気的特性などを述べるつもりは毛頭ありません。

その辺は技術誌に任せておいて、どうして今オーディオに真空管なのかを述べたいと思います。

振り返ると1900年初頭に真空管の三極管が生み出されて以来、拡声装置—音響用増幅器として改良を重ねて大きな出力を取り出すために5極管が開発され、その反面スペースや電源電圧を大きく取ると電源効率が悪くなり次第に効率の良いソリッドステート素子、そして現在ではDクラスすなわちデジタルアンプへと変貌するわけです。

もちろんオーディオ機器も他の電気製品と同じ様に進化してしかるべきですが、他の電気製品はその機器の価値は性能や使いやすさがセールスポイントとなります。すなわち技術力がその製品の価値を左右することとなります。

ここでお気づきだと思いますが、オーディオ機器は家電であって家電では無いということです。またオーケストラ、ジャズ、ポップスどれをとっても音楽を声や楽器によって奏でる芸術ですが、オーディオも実は芸術を表現する大切な電気楽器と呼んでもおかしくありません。

音楽＝芸術、このことは音楽こそが心を豊かにし文化を伝えるための道具の一つと信じています。

1980年初頭メディアがレコードからCDに変わっていった時期がありました。

誰もがあのレコードの‘パチパチ’音とおさらば出来ると信じ各社がそろって製品を開発していった訳ですが、どうしてもアナログレコードの音質に勝ることが出来なかった時代でした。

それは音楽をデジタル信号の符号に単純に置き換えたため、大切な音楽ソースのニュアンスや録音会場での空気の動きなどを適切に表現できる技術はまだ無かったと考えられます。

今でこそスーパーオーディオCDやブルーレイオーディオなどに進化してきて情報量をいかに伝達するかが重要なポイントになりました。

ただ音楽的という部分ではソリッドステート製品では立ち入れない部分を真空管がいかに効果を発揮するかがポイントになります。



超小型プリメインアンプ Ruby ¥63,000

2. 出力 3W の小型真空管アンプとの出会い

トライオードの創業前のまだ私がいちオーディオファンだった頃の話に戻りますが、私の友人が、たかだか出力 3W の真空管アンプを自作したから聞いて欲しいと持ってきたことがありました。1980 年代ですからトランジスター全盛の時代で真空管アンプ＝高額という時代で、私自身当時は、花形のトランジスターアンプやスピーカーを愛用していたわけです。

まあたかだか 3W のアンプでは無理だろうとたかをくくっていました。ドライブするスピーカーは 46 センチウーファーを搭載した 4 ウェイスピーカーでした。電源スイッチをいれて音楽が出たとたん、この音色は何だ！まさに目から鱗の状態でした。

3. 新しいオーディオの世界へ

この時、これこそがオーディオの目指すべき道であると確信して現在のトライオードに至っています。どうしてこのような芳醇なコクのあるサウンドを真空管は出せるのか？単純でかつ原点に戻った疑問を当時から未だに考え続けて今日に至ります。さりとて過去のイメージの真空管アンプのイメージを払拭し新しいオーディオの世界を作りたい、決してビンテージでは無く古くさくなく、現代のダイナミックレンジに優れた録音のメディアを再生したり、スーパーオーディオ CD の情報量も損失無く、かつスピード感ある躍動的なシステムの構築を目指しています。

オーケストラの生演奏であっても指揮者や楽団員一人一人のコンディションでイメージが変わるものです。よくオーディオマニアの間では原音再生という言い方をしますが、実際の生演奏では毎回イメージが違うのが常です。弦楽器一つとってもその演奏者のコンディションで変わるわけです。真空管のオーディオ装置は真空管によって楽器の質感が変わってきますが基本的な質感さえ抑えておけば、どんな楽器でも躍動感のある表現することが可能です。

4. デジタル機器との融合

現代のデジタル機器の性能は素晴らしく、忠実に音楽を表現しますが、先ほど述べた音楽のコクを出すのが難しいとも言えます。当社の基本的なシステムは全段真空管で構成された真空管プリメインアンプなどがメインになりますが、他のトランジスター機器に真空管装置をプラスするだけで音楽性のある音楽を再生することが可能となります。

昨年暮れにデビューした第五世代の CD プレーヤー TRV - CD5SE と DAC コンバーター TRV - DAC1.0 です。

これらのシステムを購入される方の多くはトライオード以外のトランジスター機器をお持ちの方と聞きます。



USB DAC 搭載小型プリメインアンプ ¥136,500

機器の性能だけでは音楽を表現できないのがオーディオ装置の面白いところで、今後の機器がますます性能重視になっていけばいくほど真空管の音楽表現をとりいれた機器の需要が多くなることと確信します。事実プリ段に真空管を使用した製品をずいぶん目にするようになりました。

確実に今後のオーディオには真空管は無くてはならないものとなる理由は二つ、前途した音楽性に関わる部分と、その生産体制にあります。オートメーションで製造できないのが真空管で数に応じた生産量を生産することが可能です。トライオードではこの18年間の間に5万台以上の生産実績があります。これが真空管オーディオへの道しるべが多少でも引けた実績と考えます。今後真空管オーディオに期待していただきたいのと同時に、是非真空管サウンドデビューを果たして下さい。

2012 年「オーディオ・ホームシアター展」より
迫力絶妙な 45 名のブラスバンドを
80 名を超える参加者がデジタルレコーディング！
「音展の生録イベント」

録音機器・技術普及委員会主査
岩出 和美

1. 生録ワーキンググループについて

(一社)日本オーディオ協会には「録音機器・技術普及委員会」がある。商品ジャンルとして大きな存在になった、高品位 IC レコーダー、つまりハンディ PCM/DSD 録音機の普及浸透を促進し、録音再生という作業をオーディオにおける文化として定着させることを目的としたグループだ。構成は各録音機製造メーカーと一部出版社。

開催するイベントは主に、一般オーディオファンを対象にした「ライブレコーディング体験会」とセミナーである。2009 年の「A&V フェスタ」から、昨年の「オーディオ・ホームシアター展 2012 (音展)」まで計 5 回と、臨時の 1 回、計 6 回の「ライブレコーディング体験会」を開催している。

2. 音を録音するという文化推進

さていま、なぜ生録＝ライブレコーディングなのだろうか。オーディオの黎明期、高音質音楽ソースとして、あるいは高額であったレコードの代替メディアとしてオープンデッキの録音が、オーディオファンの間で盛んであった。そして FM 放送のエアチェックとしてカセットデッキでの録音が全盛を極めた時代もあった。また一方では、それらオープンやカセットの録音機のインフラを利用して、自然音や蒸気機関車、そして音楽録音をする生録ブームも起きたわけだ。もはや記憶の範疇だが、ロクハンとかサウンドボーイといった専門誌もいくつか登場した。もちろんブームを反映したレコードも多く発売されていた。野鳥、飛行機、自衛隊の演習、花火、日本各地の珍しい音、そして後に紹介する石田善之氏に代表される、蒸気機関車の録音が話題を集めた。スタジオを出ても、かなりの高音質で録音できる時代となったこと、そしてそれを再生する環境が整ったことを象徴することがらであった。ところがその後急速に生録ブームは衰退した。私見ではあるが CD 登場によって、手軽にいい音、豊富な音源が入手できるようになり、再生オーディオが主役となったためと思われる。

雑誌の取材で生録をしているとよく言われることがある。「いまは便利で安価なビデオムービーがあるではないか、画も音も結構良く録画録音できる」ということだ。確かにデジタルになりムービーの性能は格段に向上した。音も PCM が採用されはじめた。そしてかなり小型になっているので一理も二理もある。

しかし、である。音だけのソフトの存在価値は依然衰えていない。DVD、BD の世の中にあっ

て、CD/SACD は健在だし、FM や AM といったラジオは、このテレビ時代にあっても、ラジオの存在もあるにはせよ、再び盛り上がっている。やはり A と AV はきわめて近くありながら、意外と違うものなのではないか。楽しむ TPO が違うとよく言われるが、実は感動のあり方や心への入り方の位相が全く違うものではないかと思う。私は音響の専門でも大脳生理学の専門でもない、ただの文化系編集者だけど、なぜかそこは確信している。それは実際に、インタビューや生録で録音した音を聞けば誰にでもわかるだろう。記憶と懐かしさ、生々しさが心にしみ込むからだ。

3. ハンディレコーダーの用途提案

最近のデジタル録音ブームはまさにデジタルの恩恵である。ハイレゾリレーションは当たり前、DSD 録音ができるものまである。しかもステレオマイクが付いてコンパクト。メディアはフラッシュメモリーで、録音できる時間はアナログ時代には想像できないくらい長時間が可能になっている。机 2 台分以上の装置だったデノンの初代 PCM 録音機や、高級アンプ 1 台分だった初のコンシューマー用プロセッサー、ソニー PCM-1 (録音記録するには別のビデオデッキが必要だった) からすると、その進歩は隔世の感だ。

ハンディ PCM レコーダーは、ローランドが、演奏家や、ライブ録音ファン向けに開発したのが最初。特にコンパクト低価格の R09 の登場が火付け役になった。音楽練習用、インタビュー用、番組取材用、そしてライブ録音用として人気を集めたと同時に、各社がそれぞれの視点で、製品を投入するに至り、それまで会話録音用の中に位置づけられていた IC レコーダーから別れ、一つのジャンルとして世の中に認識されるに至っている。第何次からかはわからないが新生録・レコーダーブームが到来したわけだ。

生録ワーキンググループでは、これらハンディ・デジタルレコーダーのさらなる認知と用途提案、そしてライブ録音において問題となる著作権の意識向上をテーマに活動している。2012 年の活動としては、前述の音展での「ライブレコーディング体験会」があげられる。ここで概要をご報告しておこう。

4. 音展のイベントでは 44 名の豪華ブラスアンサンブルを録音

一般ユーザーを集めての体験会の録音対象はすべて音楽で、パーカッションとブラスのアンサンブル、アコースティックギターをベースにしたデュオ、セミビッグバンドジャズ、クラシック系のトリオなど、なるべく電気を使わないプログラムを選んで、しかも大切な思い出として残るようそれぞれ、一流の音楽家を登場させている。

そして昨年は 6 回目。演目は、ブラスアンサンブル＝吹奏楽とした。中学、高校、大学と長い間、参加生徒、学生の多いジャンルである。練習にハンディレコーダーを使う機会も多く、しかも大勢のアンサンブルのため、録音の腕がものをいうという、ワーキンググループの判断であった。最初は学生のフレッシュな息吹をテーマとしたが、丁度全国大会のシーズンと重なり、プロアマ特別編成のワнтаイム吹奏楽団、「アトラクティブ・ウインド・オーケストラ」の録音とあいになった。この楽団は一流ミュージシャンが主導する、44 名のブラスオーケストラ。バンドのマスターはトランペットの石井慎太郎氏、指揮者は中野和彦氏。そしてソロとしてクラリネットの益

田英生氏、チューバの本間雅智氏、トロンボーンの橋本勇太氏、サックスの塩川光二氏がフィーチャーされた豪華メンバーである。

演目はライトクラシックからラテン、ジャズまでをカバーする、ブラスアンサンブルならではの多彩なもので。締めくくりは誰もが知っているディズニーメロディで、とても楽しいプログラムであった。そのビッグでゴージャス、しかも生ならではの精緻なアンサンブルをそれぞれ、小さな高性能 PCM レコーダーで録音体験できるわけで、こんなチャンスは滅多にはないだろう。

5. 多くの参加者が録音の醍醐味を楽しむ

体験会は「音展」開催期間中の 2012 年 10 月 21 日（日）に、2 回の公演が行われた。場所は富士ソフト 5F アキバホール。ワーキンググループの中の、デジタル録音機メーカー5 社、オリンパス、コルグ、ズーム、ソニー、ティアックが協賛となり、参加者への実機の貸し出しと、簡単な録音方法のレクチャーを行っている。録音機の持参も OK である。参加料は基本無料であるが、JASRAC への登録料と録音メディア費が必要となる。これはリーガルなソフトを家庭に持ち帰るためには欠かせない事柄だろう。

イベントの講師と、ワーキンググループの記録録音を担当されたのが、レコードや CD、そしてオーディオ誌で生録を実践されている石田善之氏。当日は最低限のマイクスタンドと、B&K のペアマイク、そして TASCAM/DV-RA1000HD にて記録録音を行っている。また参加者に、最低限のブラス録音のこつとレベル調整をレクチャーしている。

結果として一日 2 回公演で、各回、40 名を超える参加者が、ハンディレコーダーを使つての、ライブレコーディングに挑戦した。また演奏自体のギャラリーも多く、それぞれブラスサウンドを十分に堪能したようだ。



石田善之氏



「アトラクティブ・ウインド・オーケストラ」

2012 年「オーディオ・ホームシアター展」より

60 周年記念行事「音の歴史館」を開催して

一般社団法人日本オーディオ協会

会長・60 周年記念事業プロジェクト委員

校條 亮治

日本オーディオ協会創立 60 周年を記念する 2012 年度「オーディオ・ホームシアター展」が盛況のうちに終わりました。今展示会は 60 周年と云う節目にも当たり、多くのセミナーも展開され内容のある展示会になったと自負しているところです。ちなみに出展社数、入場者数とも昨年を超えることができホットしたところです。とりわけ会場が秋葉原に移って 4 回目となり、ある程度定着した感もあり、60 周年記念に相応しい企画として「音の歴史館」を、オーディオファンは勿論のこと、特に若い人たちに日本が誇ったオーディオの歴史を見てもらい造詣を深めてもらうために企画をしました。担当した私の想いも含めてご報告をいたします。

＜楽しい中にも価値ある企画創り＞

開催に当たり、第一の企画意図として「60 周年を記念し、オーディオ技術の進化を理解すると共に、楽しさを掘り起こし、オーディオファンの拡大を目指すことを目的とする。」としました。また、特に注釈として温故知新の解釈から、協会が進める「感性価値文化」の拡大に向け「過去を良く知り、新しきを創造する」としました。第二は、魅力ある具体的テーマが重要と考え、一つは見るだけではなく、日本のオーディオ業界が誇った技術力など、背景をしっかりと解説できる、「学芸員」を配置する。二つ目は、解説と共に実演をし、実際に当時の音を聞いてもらうことで「感性価値文化」を味わって頂く。そして三つ目は、「学芸員」に業界きっての技術陣を招聘し、お客様との対話に花を咲かせてもらい、お客様に楽しんで頂くこと。最後に、これらが十分に表現できる実物を集めること、且つ年代別にエポックメイキングな商品を集めることにしました。

実は、日本オーディオ協会は、以前から「オーディオ博物館」を作ることを大きな夢として語られてきました。先人達が世界に誇るオーディオ技術を世に送り出してきましたが、残念ながらそれらが集約されて見るところは有りません。そして各企業においても、あろうことか過去の遺物のように扱われ雲散霧消している事実もあり、大変遺憾で心が痛みます。先人の偉業や歴史に学ばない民族は必ず滅びることを歴史が物語っています。私もそれほど多くの各国を廻ったわけでは有りませんが、欧州などはやはり歴史を重んじる風土として成熟した文化を感じます。

一方で我が国自体や日本のオーディオ企業はどうでしょうか。私が申し上げているのは、過去にしがみついたり、ノスタルジ的に感傷に浸ることを申し上げているのではなく、積極多感に新しいことに挑戦するにも、過去を冷静に洞察、考察する力が必要であることを言いたいのです。

＜魅力ある商品集めに汗を掻く＞

さて話が少し横道にそれましたので戻しましょう。今回はこれらの商品提供の協力を会員企業

に求めました。やはり先ほど申し上げましたように、収集作業に大変な労力を要しました。自主提供でしたが先ず、何が、どこに、あるのか判らない状況からのリスト作りから入りました。

特に、1950年代及びそれ以前のオーディオ草創期における商品の選定と実動するかどうかを含めた実物確認では、「金沢蓄音器館」、「ビクターエンターテインメント(株)」、「日本コロムビア(株)」の皆様のお力添えなくしては成り立ちませんでした。特にエジソンが発明した実動する「蝋管蓄音機」、国産初期若しくは一号機である「ビクトロラ」、「ニッポノフォン」など実際に音が出せる状況にメンテナンスされていることは素晴らしいことです。また、時代を表す代表として真空管などの部品では「富士通テン(株)」様に対処頂きました。初期のラジオ受信機や車載ラジオ、名器と云われたスピーカユニットなど今は亡きブランドも多くありました。また、当時の技術をリードしたものを多く集めることができ期待が膨らみました。そして各社のエポックメイキング的な商品としてセットステレオ、スピーカーシステム、アンプ、チューナー、LP プレーヤー、ターンテーブル、カートリッジなどアナログ技術の粋を極めた商品。さらにデジタル時代を代表する DAC、DAP、AV アンプなどデジタル時代幕開けの商品。また、真空管からシリコントランジスタへの転換期の商品。CD プレーヤーやウォークマンの 1 号機、レーザーディスクプレーヤーなど時代を変えた商品、競合商品としていつも泣かされた強敵商品やユニットなど 70 点以上が集まりました。



ニッポノフォン 35



ビクトロラ J-51 型



蝋管蓄音機

＜貴重な個人所有商品を借りる＞

特に石井信一郎様、佐伯多門様、高松重治様には個人や知人の所有商品までお借りすることができ、本当に感謝を申し上げます。また時代の変遷を理解するうえではメディアは欠かせず SP レコードから SD カードまで出品でき、ご覧になったお客様は、まさにその時代にご自身の人生を映すことができたものと思います。

そしてオーディオ協会事務局も書籍のバックナンバー、エジソンの肉声が入った CD など貴重な資料も提供しました。出品総数は 100 品を超え、

エジソンの肉声が入った CD (左)
と協会所蔵の書籍

部屋に入るかどうか別の心配が出てきました。

＜大活躍の学芸員＞

課題は解説ができる学芸員の確保です。幸いにも個人会員で我が国スピーカー技術の第一人者と云われた佐伯多門氏、光ディスクが専門の現監事の相澤宏紀氏、スピーカー設計技術の田中博氏、小型スピーカー・ヘッドホン開発の田中康史氏に協力頂くことができ、大車輪のご活躍を頂きました。

お客様もまさか第一人者の方々から直接聞けると思われず入場されていたので大喜びでした。往年の名器の前で学芸員とのツーショットのお客様や、サインを要望された方もおられ大人気でした。



学芸員左から、田中博氏、佐伯多門氏、相澤宏紀氏、田中康史氏

＜金沢蓄音器館が秋葉原“音展”にやってきた＞

ビッグイベントは金沢蓄音器館の八日市屋館長出演の、エジソン蠟管蓄音器とニッポノフォンによる試聴とトークです。土曜日の昼時 1 時間という短い時間でしたが、ルーム内特設会場は開始前から関心のあるお客様が来館され、最前部はフロアに胡坐すわりの状況となりました。金沢蓄音器館の全容と活動紹介があり、いよいよエジソン蠟管蓄音器による試聴となり、どんな音が出てくるのか興味津々でした。意外に大きな音が出てきたのには皆さん驚きの声です。次に SP レコードとレコードプレーヤー国産第一号のニッポノフォンの試聴です。ビングクロスビーのホワイトクリスマス、エルビスプレスリーの監獄ロックなど往年の名盤がかけられ、直すわりの欧米人と思われるお客様は大喜びで“ベリーゲー”の連発でした。大変やわらかい音が結構な音量で聴けたことにお客様は、私たちが忘れてきた暖かいものを感じることができたものと思います。

また、金沢蓄音器館は現在 600 台以上のアナログ蓄音器と、蠟管や SP レコードは 3 万枚を超える所蔵をしており、これらは貴重な音源であり国会図書館に残すべき遺産として CD 化への協力もしているそうです。

八日市屋館長の名調子もあり、お客様からのリクエストにも応えながら大変短い時間でしたが皆さん大いに満足されました。

さらに 6 階の出版物及び協会 CD の販売ブースでは、金沢蓄音器館にて日本ビクターが開発した大型蓄音器である、クレデンザーで再生した音楽を CD に収録した日本コロムビア制作記念 CD を求めるお客様もいました。



八日市屋館長の講演

＜往年の名器とエジソンの肉声を聴こう＞

個人出品の中に佐伯氏の DS-251 スピーカーと、高松氏知人所有のトリオ社製の W-45 アンプを使っの試聴コーナーでは、皆さん立ち止まって見るだけではなく、懐かしくも今もって奏でくれる名器に歓心と、当時のご自身をだぶらせている方が多く見られました。中には名器を写真に撮るご年配の姿も見られ、インタビューをすると、若い時で少ない給料を貯め、なけなしの貯金をはたいて購入したが、実にいとおしい商品であったこと、苦しくとも楽しい時代であったと、良き時代を思いだしながらしみじみと話されたことが印象的でした。やはりオーディオ・音楽は時代と共に生きてきたことと、ご当人の心の中にはいまだオーディオが健在であることを強く感じました。また、エジソンの肉声を聞くコーナーでは皆さん驚きの声を上げていました。エジソンってこんなしわがれ声だったのかと何度も確認されていました。特に家族連れ、カップル、乳母車を押した若いお母さんなど大変興味を持って聞き入っていました。



トリオ社製の W-45A (左)



三菱電機 DS-251 スピーカー (右)

＜楽しい同窓会＞

当開催を早くから知られた会員 OB、業界技術者 OB の方々が詰めかけられ、にぎやかな同窓会が連日見られました。時代をリードしてきた自負と、人生の苦楽をオーディオと共に歩んでこられてきた方々だけに、皆さん思いは共有できたのでしょう。当時に思いをはせ、話の輪が広がっていました。会場を出られた後もこれから二次会をやるなどと楽しそうに秋葉原の町に繰り出されたようです。主催者、並びに担当としても、このような贈り物を皆様にできたことは本当に嬉しく心がしびれました。“感動万歳”

＜まとめ＞

まずは、出品頂いた会員企業、個人の方々に心から感謝を申し上げます。また学芸員を務めて頂いた方々にも厚く御礼を申し上げます。60 周年記念事業の一環として開催したことから展示会の中での 3 日間という短い期間でしたので足りない部分は多々ありましたが、お客様、関係者とも大いに満足頂けたものと自負をしております。

一方で、このような重要な技術商品の歴史が忘れられてしまうことによる問題点がお客様からも多く寄せられました。昨今、良く聞かれるのは、会員企業の中でもオーディオ技術が軽視され、無くなりつつあること、技術継承がされず国内企業ではオーディオ文化は創れなくなっていることなどが聞かれます。このことは関係他業界も同様であり、国内では本物の音楽産業はもはや成

り立たないとか、スタジオや録音エンジニアも必要されなくなってきたなどを聞きます。日本人が大切にしてきた感性価値文化を自ら破壊してどこへ行くのでしょうか。冒頭にも申し上げたように単に、ノスタルジアで見るのではなく新たな技術を立ち上げるためにも歴史を知る必要があるということです。もちろん突然のひらめきによる技術開発も有りますが、それは宝くじに当たるより難しいと言わざるを得ません。

明日の「日本オーディオ博物館」の設立を夢見て、今後、日本オーディオ協会としては、少なくともこれらの歴史の所在地を明確にしていくことと、せめて文献・写真等で残すことを目標に取り組みたいと考えます。重ねましてご協力いただきました皆様に心から御礼を申し上げます。そして、私たちが忘れかけていた大切なものを届けてくれて有り難う“音の歴史館”。

時代区分けと展示品一覧

(1) 草創期・・・1950 年台～以前（畜音と再生技術から放送の始まり）

- ①Edison Standard Phonograph 円筒式蝸管蓄音機 1903 年（ビクターエンタテインメント(株)）
- ②ホーン内蔵型卓上型蓄音機ビクトローラ J-51 型 1930 年頃（ビクターエンタテインメント(株)）
- ③ニッポノフォン 35 号〈国産初の蓄音機 4 機種中のひとつ〉1910 年発売
(株)日本蓄音器商会（現日本コロムビア(株)）
- ④当選号ラジオ R-31〈写真展示〉1931 年（松下電気器具製作所（National））
- ⑤5 級スーパーラジオ R-56 1953 年発売（日本コロムビア(株)）
- ⑥口径 20 cm HiFi スピーカーシステム 8P-W1 1954 年
(松下電器産業(株)（National/Pnasonic〈アメリカ向け〉）
- ⑦真空管式車載ラジオ TAR-55 1955 年（富士通テン(株)）
- ⑧エジソンの肉声デモ 2 機〈日本オーディオ協会 50 周年 CD より〉
- ⑨真空管一式 30 本（富士通テン(株)）

(2) 成長期・・・1960 年台～1980 年台（HiFi の幕開けとデジタル化への挑戦）

- ①非同軸 2 ウェイスピーカーシステムダイヤトーン 2S-305 型 1958 年発売（三菱電機(株)）
- ②セパレートステレオ PSC-1 1960 年（パイオニア(株)）
- ③アンサンブルステレオ DSC-760 1962 年（日本コロムビア(株)）
- ④ステレオプリメインアンプ W-45A 1960 年代（トリオ）
- ⑤ステレオチューナー AF-270 1960 年代（トリオ）
- ⑥MM 型ステレオ・カートリッジ第 1 号製品 AT-1 1962 年発売（(株)オーディオテクニカ）
- ⑦プリメインアンプ TA-1120 1965 年（ソニー(株)）
- ⑧小型スピーカーシステム Technics1 1965 年（パナソニック(株)）
- ⑨フォノカートリッジ DL-103 1964 年〈1970 年市販開始〉（(株)ディーアンドエムホールディングス）
- ⑩非同軸 3 ウェイスピーカーシステムダイヤトーン DS-251 1970 年発売（三菱電機(株)）
- ⑪ダイレクトドライブプレーヤー SL-1000 1970 年（パナソニック(株)）
- ⑫ターンテーブル SP-10〈世界初ダイレクトドライブ方式〉1970 年（松下電器産業(株)）

- ⑬ダイレクト・ドライブターンテーブル DP-3000 1972 年 (株)ディーアンドエムホールディングス)
- ⑭真空管アンプ SQ38FD 1970 年 (ラックスマン(株))
- ⑮オープンリールデッキ A-4010 1965 年 (ティアック(株))
- ⑯AM/FM チューナー T-100 1973 年度 (Accuphase Kensonic)
- ⑰ステレオコントロール・センター C-200 1973 年度 (Accuphase Kensonic)
- ⑱ステレオパワーアンプ P-300 1973 年度 (Accuphase Kensonic)
- ⑲スピーカーシステム NS-1000M 1974 年 (ヤマハ(株))
- ⑳リニアフェーズスピーカーシステム〈世界初リニアフェーズスピーカー〉 SB-S07 1976 年
(パナソニック(株))
- ㉑レーザーディスクプレーヤ〈民生用光学式ビデオディスクプレーヤ 1 号機〉 LD-1000 1981 年
(パイオニア(株))
- ㉒バキューム式ディスク・スタビライザー AT666 1981 年 (株)オーディオテクニカ)
- ㉓CD プレーヤー 1 号機 CDP-101 1982 年発売 (ソニー(株))
- ㉔レコードプレーヤー GT-2000 1982 年 (ヤマハ(株))
- ㉕CD プレーヤー CD-63 1982 年 (株)ディーアンドエムホールディングス)
- ㉖ステレオ・ディスク・プレーヤー・システム AT727 1982 年発売 (株)オーディオテクニカ)
- ㉗デジタルサウンドプロセッサ DSP-1 〈世界初実測温度データ内蔵〉 1986 年 (ヤマハ(株))
- ㉘DA コンバーター DC-81 1986 年度 (Accuphase)

(3) 第一成熟期・・・1990 年台～2010 年 (本格的デジタル化の幕開けと進化)

- ①AV アンプ AVX-2000DSP 1990 年 (ヤマハ(株))
- ②業務用 DAT レコーダー PD-2 1991 年 (フォステクスカンパニー)
- ③オーディオシグナルプロセッサ AX1000 1991 年 (株)ディーアンドエムホールディングス)
- ④CD トランスポート & DA コンバーター DP-S1 & DA-S1 1993 年 (株)ディーアンドエムホールディングス)
- ⑤デジタルオーディオボード SE-U77 1998 年 (オンキヨーマーケティングジャパン(株))
- ⑥SACD プレーヤー 1 号機 SCD-1 1999 年 (ソニー(株))
- ⑦AV アンプ VSA-AX10 〈世界初自動音場補正搭載〉 2001 年 (パイオニア(株))
- ⑧ホームオーディオスピーカーシステム 512 〈タイムドメイン理論採用〉 2001 年 (富士通テン(株))
- ⑨HD オーディオコンピュータ APX-2 2008 年 (オンキヨーマーケティングジャパン(株))

(4) 時代を変えた技術達

- ①口径 16 cm コーン型フルレンジスピーカー P-610 1947 年発売〈改良品 1979 年〉 (三菱電機(株))
- ②ホーンスピーカー 5HH17 1968 年 (パナソニック(株))
- ③8トラック式 4チャンネル・カーステレオ TP-41 1970 年 (パイオニア(株))
- ④コンポーネントカーステレオ KP-55、GX-7 〈業界初〉 1976 年 (パイオニア(株))
- ⑤ウオークマン TPS-L2 〈初代ウオークマン〉 1979 年発売 (ソニー(株))
- ⑥4トラック・ポータブル・カセットレコーダー X15 〈世界初〉 1982 年 (フォステクスカンパニー)
- ⑦車載用 CD プレーヤー CD-1100 〈世界発・83 年トヨタ自動車と共同開発〉 1985 年 (富士通テン(株))

⑧カーCD プレーヤーCDX-1〈世界初〉1984年(パイオニア株)

⑨ミニディスクデッキ1号機 MDS-101 1993年(ソニー株)

(5) 日本オーディオ協会出版物並びにソフト関係を展示

＜日本オーディオ協会出版物＞

①オーディオ資料 1956年、1957年、1958年、1960年

②JAS 会報 Vol.1

③オーディオ協会誌 Vol.1～Vol.4 Vol.5～Vol.10

④JAS ジャーナル Vol.20、Vol.21

⑤JAS コンファレンス Vol.1 (1986年～1990年)

⑥オーディオ 10年の歩み

⑦オーディオ 50年史

＜ソフト関係＞

①日本コロムビア株より

SP 盤、EP 盤、LP 盤、オープンリールテープ、8 パックカートリッジテープ、カセットテープ、DAT テープ、ミニディスク、12cmCD、8 cm CD、USB メモリ、SD メモリ、ミニ SD メモリ、メモリースティック DVD、BD

②ソニー株より

CD 一号盤、SACD 一号盤、MD 生ディスク



世界初の CD 1982.10.1 発売 (日本コロムビア株)



SP 盤 (日本コロムビア株)



EP 盤 (日本コロムビア株)

2012 年「オーディオ・ホームシアター展（音展）」イベント

「音のサロン」報告

一般社団法人日本オーディオ協会
渡邊 哲純

皆様ご存知のように、2012 年のオーディオ＆ホームシアター展が昨年 10 月 19 日から 21 日まで秋葉原において開催されました。

今回の音展は昨年以上の来場者で賑わいましたが、特に富士ソフトアキバプラザの 7 階で開催された「音のサロン」には、3 日間で 1000 名を超えるお客様が来場され大好評でした。

日本オーディオ協会では会員会社 11 社により構成される「音のサロン委員会」が「良質の再生音楽を良質の再生環境で楽しんでいただくライフスタイルの普及」を目指、種々の活動を推進していますが、これらの活動を総称して「音のサロン」と呼んでいます。

音のサロン委員会の具体的な活動としては

1. 音展における協会主催「音のサロン」の企画運営（年一回開催）
2. 千代田区と一般社団法人日本レコード協会との共催の千代田区民講座「音のサロン」の企画運営（年 4 回開催）
3. PC オーディオの健全な発展のための協会主催「PC オーディオ講座」の企画運営（年 4 回開催）などを推進しており、本年はさらにこれらの活動を充実させるべく検討を進めていますが、ここでは、年が変わってしまいましたが 1. の音展の中で主催者イベントとして企画された「音のサロン」について報告させていただきます。

本年度開催された音展「音のサロン」では、ご来場のお客様に喜んでいただけるよう委員会で検討を重ねた、10 のプログラムを用意しました。

また会場の再生環境を整えるため、ヤマハさんの協力をいただき、壁面に調音ボードを設置し音質の改善にも配慮しました。



各プログラムは、それぞれ試聴機器の組み合わせを変えて、色々なメーカーの組み合わせで音楽を楽しんでいただけるようにしました。

以下にそれぞれのプログラムの概要を紹介致します。

10月19日(金)

①最新最高音質の配信音楽を聴く(パート1)

講師 オンキヨーエンターテインメントテクノロジー(株) 黒澤 拓氏
(有) エフ 藤田厚生氏

平日の午前のプログラムにもかかわらず開場前から行列が出来き、開演の11時には満席の状況で講演が始まりました。黒澤氏の挨拶について藤田氏が高音質配信の現状や楽しみ方の解説と、最新のメジャーレーベルの配信ソフトの試聴がすすみ、お客様は音質配信音楽の良さを堪能されていました。



②真空管アンプでアナログレコードの名演を聴く

講師 音楽プロデューサー 伊藤 八十八氏

伊藤氏が御自分で制作に携わったジャズの名盤のアメリカでの収録の裏話などを交えた解説は、普段の試聴会では聞くことの出来ない貴重な話で、立ち見のお客様が大勢おられましたが途中で退席する方もなく、皆さん最後まで楽しんでおられました。

来場者からは「ジャズはアナログが最高」との声も聞かれ、来年の開催を楽しみにしているとのメッセージもいただきました。



③Female Vocal(高橋真梨子・岩崎宏美)を聴く

講師 テイチクエンタテインメント プロデューサー 湯田 淳一氏
ビクターエンタテインメント 販売促進グループ 前田 格氏

オーディオの試聴会では使われることの少ない日本のポピュラー音楽歌手のソフトを、オー

ディオマニアだけでなくより広くの方に楽しんでいただくために企画したプログラムでしたが、最新のアルバムを中心にソフト会社の講師の解説付きで聴いていただき、きちんとした再生機器とスピーカーで聴くすばらしさを再認識していただくことができたプログラムでした。



④シャンソンとフランス文化の楽しみ

講師 元 FM fan 編集長 小林 俊彦氏

昨今は耳にすることが少なくなったシャンソンをあえてとりあげましたが、シャンソンに造詣の深い講師のお話と、私蔵の貴重なソフトを使っの視聴は、来場者からは「久しぶりにシャンソンを聴き自宅に戻ったら自分のソフトをもう一度聴いてみたくなった」などの声が寄せられていました。



10月20日(土)

①最新高音質配信音楽を聴く(パート2)

講師 (株)クリプトン オーディオ事業部長 渡邊 勝氏

(株)カメラータ・トウキョウ 中野 浩明氏

前日のパート1に変わって、クリプトン HQMstore の配信音源と CD との比較試聴を交えたプログラムで、最新の高音質配信のソフトの音質のすばらしさを認識させるには最適なプログラムでした。

昨日のパート1と本日のパート2共に朝1番のプログラムにもかかわらず満席で、昨今のハイレゾ配信音楽への関心の高さを実感させるものでした。

そうした中で来場者からは PC オーディオの使いこなしの難しさが指摘されており、音のサロン委員会としては、昨年の PC オーディオ入門講座に引き続き本年も PC オーディオ講座を4回開

催の予定で、現在内容の検討を進めています。



②高音質 CD から HD-sound までの音質の進化

講師 一般社団法人日本レコード協会 ビクターエンタテインメント 鈴木 順三氏

パッケージソフトの市場拡大に注力している日本レコード協会としての「音のサロン」での講演は初めてでしたが、ソフト各社が CD を中心としたソフトの高音質化へ向けて種々の取り組みをしており、それらを比較できたこの講座は大変意義のあるもので、今後もレコード協会とオーディオ協会が協力しての活動の重要性を認識させるものでした。



③1920 年代に生まれた名出力管 250 プッシュプル・アンプで聴く WE594

講師 真空管オーディオ協議会 評論家 新 忠篤氏

真空管オーディオ協議会と JAS では一昨年の秋から、オーディオ業界の活性化を目指し協力して活動することに合意し、手始めにそれぞれの主催展示会において、相互に来場者に向けた講演会を行うことにしました。その一環として今回は上記講演が計画されましたが、リハーサルで WE594 が動作せず、急遽スピーカーの入れ替えをするなど不測の自体も起こりましたが、新氏のお人柄のにじみ出たお話に、日頃真空管の音を聴く機会の少なくなった参加者からは、この企画を喜ぶ声が多く寄せられていました。



④学生による楽しいクラシック・ディスクコンサート

講師 東京大学・早稲田大学古典音楽愛好会 新津 健一郎氏他2名

恒例になったこのプログラムは、学生諸君が自ら講師となり事前に試聴するソフトに関する勉強をいただきこの場で発表するものですが、年々来場者も増え、通常の試聴会では聞くことのできないフレッシュな話と試聴を楽しんでおられました。

また終了後も講師に今回使用したソフトに関する質問をされる熱心なお客様などがおられ大好評でした。



10月21日(日)

①最新 PC オーディオ試聴会

講師 JAS 音のサロン委員会委員

前述のようにオーディオ協会では昨年「PC オーディオ入門講座」を開催してまいりましたが、これに参加された皆さんから各社 DAC などの聴き比べの場を作ってほしいとの声が多く寄せられました。そこで今回初めてこのプログラムを用意し、メンバー会社7社の DAC やネットワークプレーヤーを切り替えての試聴を行いました。

2時間の長時間プログラムでしたが、あふれんばかりのお客様からは、めったにない企画で大変参考になったと大好評で、今後の PC オーディオの市場の伸びを予見させる熱のこもったプログラムでした。



②価格帯別コンポの魅力を探る

講師 オーディオ・ビジュアル評論家 麻倉 怜士氏

3日間の音展「音のサロン」最後のプログラムです。

前は 90 分のプログラムで行いましたが大好評でしたので、今回は 2 時間に時間を延ばし、30 万円から 200 万円までの価格帯を 5 グループに分けたハード機器の組み合わせで、課題曲 3 曲(各組み合わせ共通)と自由曲数曲をお聴きいただきました。

麻倉氏は開催前日の 18 日夕刻に 2 時間以上かけて持参された大量のソフトを機器の全組み合わせ別に実際に掛けて確認し本番に備えられ、参加者に記入いただいたアンケートでも、「このイベントはすごい、大変参考になった、選曲が良い、来年も是非願うする」などの自由記述でのご意見が多数寄せられていました。



こうして 3 日間の「音のサロン」は講師の方は勿論ですが、音のサロン委員会メンバー 11 社の委員の方の絶大なるご協力により、大好評の内に終えることが出来ました。

冒頭でも書きましたように、音のサロン委員会の活動は「良質の再生音楽を良質の再生環境で楽しんでいただくライフスタイルの普及」を目指した活動です。

昨今音楽を楽しむことがいつでも、何処でも出来るようになったことは喜ばしいことですが、ご家庭ではせっかくのすばらしい音楽ですから、スピーカーから発される音楽の感動を、コーン紙から送られる空気振動を肌で感じながら楽しんでいただきたいと思います。

音楽は耳だけで聴くものではないのです。

是非、体全体でその感動に触れていただきたいと思います。

本年も委員会ではこうした「音のサロン」活動を、各社協力して益々充実させて参りますので、JAS ジャーナルをお読みの皆様のご支援を心より願うものです。

最後になりましたが、委員の皆様は自社の本業の傍ら、忙しい中手弁当でこの委員会活動に参加しご協力をいただいております、この誌面を借りて心より御礼申し上げます。

MEMBERS PLAZA

無反動スピーカーシステムについて

個人会員
今井 一満

1. はじめに

昨年（2012年）10月19日から21日まで秋葉原で開催されたオーディオ&ホームシアター展日本モレックス株式会社ブースで2012年度の日本オーディオ協会大賞を受賞したNTTグループの開発した残響分離制御技術“Revtrina”のデモが行われました。この技術のデモ用スピーカーとして、一オーディオ愛好家として長年開発改善に取り組んで参りました無反動スピーカーを参考出品させていただきましたところ大きな反響をいただきましたので、以下にその内容を記載させていただきます。



写真1 オーディオ・ホームシアター展での展示

2. 開発のきっかけ

私自身は40数年来のジャズ好きな普通のオーディオファンですが、あるセミナーで知り合った友人から「ブザー等に使われている圧電素子を使って、当時広まり始めた大型液晶テレビ用のスピーカーはできないか」と持ちかけられ、この大胆な考えに興味を持ち参加することになりました。しかし期間が3か月しかなかったのでとても形にすることはできませんでしたが、この3か月間圧電素子を使って考え付いたアイデアをたくさん実験することができました。

この実験の中で、自分にとって面白い発見がいくつかあり、その中の1つが、2枚の圧電素子の中心に穴をあけ、背中合わせにして間にスペーサーを入れ、ネジ止めて鳴らした時、圧電素子特有の金属的で歪んだ音なので音質はよくありませんが、信じられないほど力強く飛び出してくるような音を出せることを知りました。

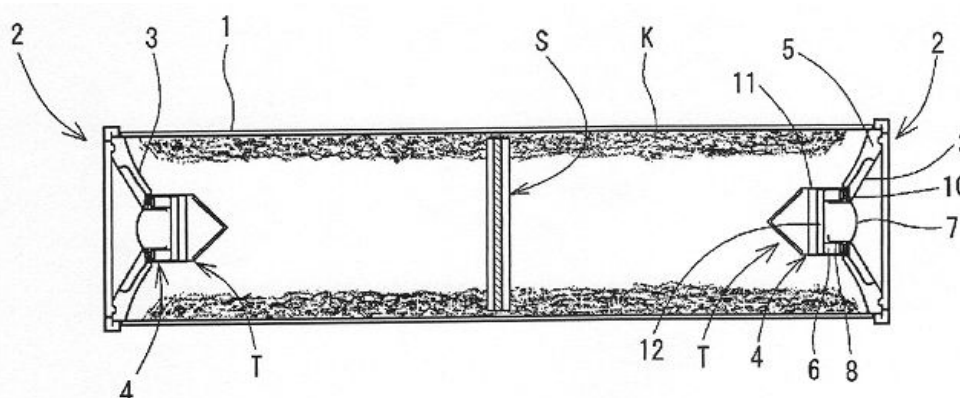
そして、この方法で圧電素子を一般的なスピーカーユニットに置き変えて試作してみると、その時の音の特徴である力強く飛び出してくる感じがしっかり受け継がれておりました。しかし、色々なソースを聞いている内、ある一定の条件の時に一瞬コーンの動きが止まって音が抜け落ちたような現象が起こることがわかりました。

そこでどうしてそのような現象が起こるのかを色々調べている内、スピーカーボックス内の定在波とそれに伴う内部圧力の大きな変化が原因ではないかと考えるようになりました。吸音材をいっぱい詰めても定在波を低減することはできませんし、多数の周波数スペクトルで定在波が発生する可能性があります。スピーカーに入力される音楽ソースには常にたくさんの周波数スペクトルが存在し、音楽信号で駆動した場合には、絶えずそのレベルと周波数は変化している為、解決方法が見つかりませんでした。

そこで定在波の発生とメカニズムを頭に叩き込みつつ考え付いたのが、次項に示す1つのスピーカーに2つのドライバーを使い、スピーカーの後ろ（内側）から発生した音波を反対側のドライバーユニットに吸音制御壁を通して届ける方法でした。

3. 試作スピーカーの構造

試作したスピーカーの構造は、図1に示す通りであり、最も需要であり最も苦勞した中央部に設置した吸音制御壁についてはスポンジ・ブチルゴム・段ボール・フェルトなどからなる複合素材を使用し、スピーカーの中で音波を受けて制限された範囲で動くように設置しました。



- 1: 共鳴壁 2: 振動部 3: 振動板 4: 振動発生部 5: フレーム 6: マグネット
7: ボイスコイルボビン 8: ボイスコイル 9: 補強体 10: ダンパー 11: カバー
12: 支持体 K: 吸音部材 S: 振動抑制材（吸音制御壁） T: 振動抑制材

図1

次にスピーカーボックスですが、大きな圧力変化の伴う方式なので、制御しやすく圧力が均等にかかる円筒形を選択しました。

又、素材としてはアルミパイプ・紙管・アクリルパイプなど色々な素材でできたものでテストした結果、音の印象・コスト・加工のしやすさ・通常使用時の温度変化・湿度に対しての安定性などを勘案して最終的に塩化ビニールのパイプを採用しました。

この試作スピーカーは写真2に見る通り基本的にはシリンダー型の対抗式スピーカーで、オーディオ界ではまともに鳴ることはないと言われていた構造を持っております。実際に私の周りのオーディオマニアの何人かに話すと、ばかにしたように「やめておけ、絶対失敗する」と音を聞いてもらうどころか、まともに相手にもされませんでした。

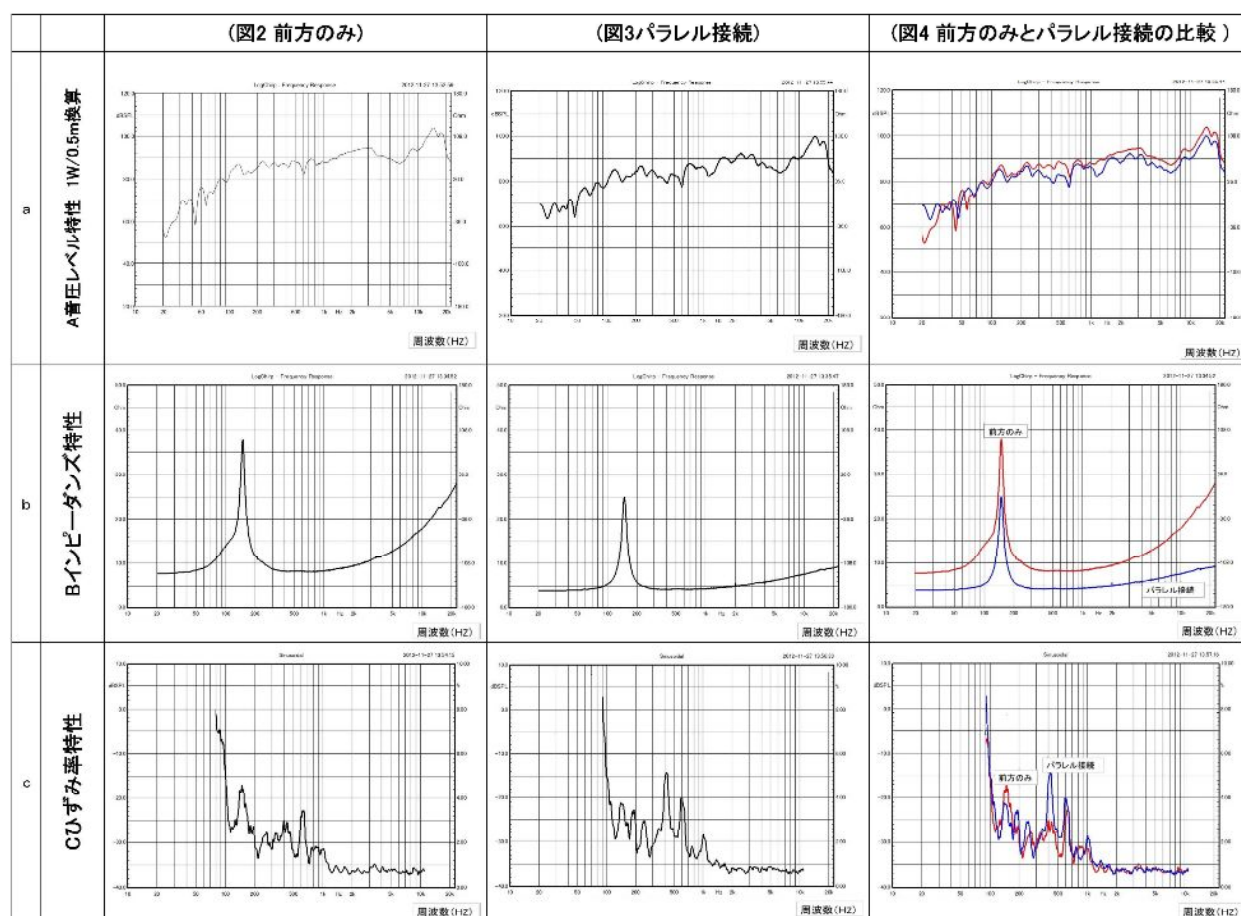
この試作スピーカーをちゃんと鳴らすには大きな圧力変化と強烈な定在波を何とかしなければなりません。その為にこれらに対応する特殊な部品を用いた吸音制御壁をスピーカー本体の中に設置しております。



写真2 無反動スピーカー

4. 試作スピーカーの測定結果

この試作スピーカーの前方のドライバーのみを駆動した場合の伝送特性、インピーダンス特性、ひずみ率特性を図2a,b,cに示し、前後のドライバーユニットを同時駆動した場合の特性を図3a,b,cに示します。図4a,b,cには図2と図3の結果を重ね合わせて示してあります。いずれも伝送特性及びひずみ特性は前方ドライバーユニットの軸上50cmの位置で測定しました。



この中で前方のドライバーユニットのみを駆動した場合と前後双方のドライバーユニットを同時駆動した場合の顕著な差は、インピーダンス特性に現れており、前後のドライバーユニットを並列駆動した場合にインピーダンス特性の値が $1/2$ になっております。この為、低インピーダンスで安定した出力が得られるパワーアンプが必要になります。

前後ドライバーユニットを同時駆動した場合の伝送特性は、特に試作スピーカーの設置状態により低音域での特性が大きく変化します。壁に近付けて設置した場合には低音が増強され、最適な設置位置を選択すれば小型スピーカーながら大型スピーカーに近い低音特性が得られます。

5. 本試作スピーカーで得られた効果

本試作スピーカーは、前後方向で背中合わせに設置したスピーカーが互いの反動を打ち消し、左右上下方向では円筒形状により、前後左右上下方向でバランスがとれております。このため特定方向の動きを持たないことから、このスピーカーを無反動スピーカーと呼んでおります。

実際にこの試作スピーカーをタコ糸で上から釣り、低音の豊かな楽曲を前のみのドライバーユニットに加えるとスピーカーボックスが前後に動き、前後のドライバーユニットを同時並列駆動するとこの動きがなくなることが目で確かめられました。このデモを昨秋秋葉原でも行い注目を集めました。

この無反動試作スピーカーで得られた主な成果を以下に列記します。

- (1) 背中合わせに配置したユニットが互いの反動を打ち消すことで、大きな音で鳴らした時もスピーカーボックスはほとんど動きません。
- (2) 一般にしっかりした低音を出すためには、反動他の影響を少なくするために大きく重いボックス、しっかりした台や床を必要としますが、本試作スピーカーの場合には軽量小型のボックスでしっかりした低音の再生が実現でき、設置場所を選びません。
- (3) スピーカーボックス内の吸音制御処理他の効果により、濁りが少なく、明瞭で、小音量でも聴き取り易い音質が確保できております。
- (4) 本試作スピーカーを前後方向に設置した場合は、音が前後方向に出るため、前方のユニットから直接音を聴くことができ、後方のユニットから出た音は後ろの壁他に当たり拡がりを持つ間接音による音場が生成されます。
- (5) 本試作スピーカーを垂直方向に設置した場合は、無反動スピーカーの特色を持つ無指向性スピーカーになります。
- (6) 無反動効果は失われますが、本試作スピーカーを 2 台使い、ステレオ音楽信号に残響分離処理を加え、音楽信号の直接音成分を前方のドライバーユニットに加え、音楽信号の残響音成分を後方のドライバーユニットから出しますと、リスニングルーム内の反射も加わり、自然なサラウンド効果が得られます。
- (7) 無反動効果は一部失われますが、この試作スピーカーを横向きに置き、2 つのドライバーユニットに左右の音楽信号を供給した場合には、通常の小型ステレオスピーカーとして動作します。

6. 終わりに

本スピーカーを試作した結果一定の成果を得ることができ、秋葉原のオーディオ&ホームシアター展での反響も得ることができましたが、今後さらなる軽量化・帯域の拡大・音質の向上を行ってゆくつもりであります。

今回の成果は、個人愛好家の手作り試作品による実験の結果です。分析不足の点については、お許しいただきたいと思います。

このスピーカーを開発するきっかけを作っていただいた友人、そしてドライバーの試作測定と本スピーカーの展示についてご協力をいただいた日本モレックス株式会社様に謝意を表させていただきます。

連載 第15回 『試聴室探訪記』

～谷口とものり、魅惑のパノラマ写真の世界～

スタジオ「サイデラ・マスタリング」

フォトグラファー 谷口 とものり・編集委員 森 芳久



今号の「試聴室探訪記」は、レコーディング&マスタリング・エンジニア、音響空間デザイナー、さらには自身で演奏家としても活躍されているオノ セイゲンさんが主宰するスタジオ「サイデラ・マスタリング」取材させていただきました。

オノ セイゲンさんは、80年代より数々のミュージシャンの国内外のツアーなどでPAエンジニアを務められ、レコーディング&マスタリング・エンジニアとして、アート・リンゼイ、オスカー・ピーターソン、キース・ジャレット、マイルス・デイビス他、一流の演奏家の多数のプロジェクトに参加されこの世界での確たる基盤を築いてこられました。

また、新世代のスタジオデザイン、店舗やレストランなどの音響空間デザインなども積極的に手がけ、2010年、2012年にはミラノサローネ（世界最大規模の家具見本市）で、建築家の谷尻誠と組んだ視覚と聴覚により空間を抽象化した展示が大好評となり、音響空間デザイナーとしての地位も確率されました。

東京都現代美術館「第3回 東京アートミーティング：アートと音楽 ― 新たな共感覚をもとめて」では、オノ セイゲン + 坂本龍一 + 高谷史郎による新作インスタレーション「Silent Spin」を発表。同作品は、3月よりシャルジャ・ビエンナーレでの展示が決まっています。

一方、演奏家としても、93年にスイス、モントルー・ジャズ・フェスティバルでデビュー。08年に3回目の出演となる同フェスティバルで、ソニーのRollyを用いた“Le petit ballets des Rolly”を世界初演するなど独自の世界を創造されています。

ディスコグラフィーとしては、87年に川久保玲から「洋服が綺麗に見えるような音楽を」という依頼により作曲した『コム デ ギャルソン／オノ セイゲン』（現在も広告関係者、選曲家必聴アイテムと評されています）ほか多数のアルバムを発表されています。

今回は、そのオノ セイゲンさんの渋谷区神宮前の仕事場であるスタジオを、谷口さんの絶妙なアングルでのパノラマ写真でご紹介いたします。プロの仕事場の雰囲気をご存分にお楽しみください。

パノラマ画像の操作説明

- パノラマ写真は、[ここ](#)か、はじめのページの**画像**をクリックしてご覧ください。
(ローディングに若干時間がかかる場合があります。)
 - マウス操作で、画面を上下・左右 360 度、自在に回転してご覧いただけます。
 - 画面下にある操作ボタンで次の操作ができます。
- + 画面のズームイン
 - 画面のズームアウト
 - ← 画面の左移動
 - 画面の右移動
 - ↑ 画面の上方向への移動
 - ↓ 画面の下方向への移動

スタジオ「サイデラ・マスタリング」のご紹介

オノ セイゲン



オノ セイゲン氏

サイデラ・マスタリングの特徴とは、マスタリング、ミキシングという正確さを追求したモニター環境で作業できることに加えて、この空間でレコーディングにも対応できることにあります。バーチ合板の音響パネルを裏返し、サンプリング・リバーブを用いてコンサートホールのような響きをつけることができます！また、最近登場した日本製の画期的な吸音／遮音素材「SHIZUKA STILLNESS PANEL」と「AURAL SONIC」を全面に用いたことで限られた空間でありながら、とくに超低域の立ち上がりと音程感が実際の容積の6倍程度に感じられます。

4K、2Kの時代だと言うのに、音楽業界の高音質やサラウンドに対するこだわりやがまったくもって足りないと言えますね。1ビット DSD をはじめとするハイレゾリューションと、高さ方向も含むサラウンドの組み合わせによる収録と再現を体験さえすれば、誰にでも本来のレコーディング／オーディオとはこういうものであることが簡単に体験／確認できます。時代なのでしょう、サイデラ・マスタリングのクライアントの50%はアマチュアかインディーズなのですから、個人のスタジオやホームシアターなどの、空間音響デザインの依頼もお気軽にご相談ください。

<主たる機材>

Sony SONOMA DSD Audio Work Station with EMM ADC/DAC (X 2 system)

Sony Sampling Digital Reverberator DRE-S777 (full option X3 unit)

Sonic StudiosoundBlade

Pro Tools | 10

KORG MR-2000S (X 4)

STUDER A-80, A-820

<モニターシステム>

「PMC MB1」(x 5.1ch) ステレオ及び 5.1ch サラウンド

ECLIPSE 「TD712zMK2」

ECLIPSE 「508DMK3」 10.1ch 高さ方向を含む立体サラウンド。

とりわけサラウンドでは、インパルス応答 1:1 になるべく近い、「正確な音」の再生を目指しています。高さ方向を含む 3D 空間を再現するには、レゾリューション（解像度）と、極力色づけないスピーカーは必須です。逆にステレオの場合は、制作現場では「正確な音」、リスニングには個人の好きな音色のスピーカーで楽しめばよいと考えています。

◆スタジオ「サイデラ・マスタリング」のホームページ <http://www.saidera.co.jp>

JAS Information

2012 年 12 月度理事会報告 第 10 回運営会議報告

2012 年 12 月 6 日に 12 月理事会・第 10 回運営会議が理事 15 名、監事 1 名と 1 名の理事代理の方の出席のもと「音の日」イベント会場の港区アジュール竹芝 16 階 憩の間に開催されました。

12 月度理事会議事

第 1 号議案「新会員の承認を求める件」

平成 24 年 9 月 12 日の理事会以降平成 24 年 12 月 5 日までの間に入会申込のあった個人会員 16 名の入会が承認されました。

第 2 号議案「協会賞選定の承認を求める件」

創立 60 周年における協会賞について表彰委員会で検討した内容が承認されました。

第 3 号議案「事務局長交代の承認を求める件」

協会事務局長が、平成 25 年 1 月 1 日付けで柚賀哲夫氏から五十嵐裕史氏に交代する人事案が会長より諮られ承認されました。なお柚賀氏は業務引き継ぎのため 1 月末まで事務局に在籍する予定です。

第 10 回運営会議

(1) オーディオ・ホームシアター展開催報告

10 月 19 日から 21 日に秋葉原 UDX、富士ソフの 2 会場で開催されたオーディオ・ホームシアター展(音展)について報告がなされました。最終的に 82 社/団体に参加していただき、3 日間で 27,500 人の来場者の方に楽しんでいただきました。今年は日本オーディオ協会創立 60 周年記念の年となり、記念展示や記念セミナーが行わ

れ、特に「音の歴史館」では歴史的なオーディオ機器が展示され終日来場者の方で賑わっていました。

(2) 展示会等基本企画会議報告

来年以降の展示会のあり方を検討する展示会等基本企画会議の検討内容が報告されました。

特に来年の開催に関しより効率的な運営を行うために開催場所、時期、形態等について抜本的に見直し、さらに運営会社、事務局費用を含めた内容についての検討結果が報告されました。この内容をもとに実行委員会で具体案を検討していくことが了承されました。

(3) その他

次回理事会は 2013 年 2 月 1 日(金)15 時から 17 時半、日本オーディオ協会の会議室で予定されています。

以上

事務局からのお知らせ

協会事務局長が 1 月 1 日付けで柚賀哲夫氏より五十嵐裕史(いがらしゆうし)氏に交代しました。

五十嵐裕史 新事務局長のご挨拶



「私はソニーでスピーカー設計、海外でのオーディオ機器生産、Super Audio CD 立ち上げ等、オーディオ関係を担当しておりました。その経験を生かし、会員の皆様と共に、オーディオの楽しみの普及・啓発に取り組んでいきますので、どうぞ宜しくお願い致します。」

JAS Information

連載「テープ録音機物語」の著者 阿部 美春さんを偲んで

編集委員 藤本 正熙

2004年7月号から2012年11月号まで、JAS ジャーナルに連載「テープ録音機物語」を8年間の長きにわたって執筆いただいた阿部美春さんが1月2日に逝去（享年81歳）されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

日本オーディオ協会創立50周年記念事業として2001年10月にJAS ジャーナル特別号「オーディオの世紀」を刊行しましたが、より詳細に日本のオーディオの足跡を記録に残すため、電音、TEAC で谷勝馬さんと共に録音機器の開発・事業化を手がけられた阿部美春さんをお願いして、2003年7月号より8回連載で「国産円盤録音機物語」（全58ページ）を執筆いただきました。「テープ録音機物語」はこの姉妹編として毎回読切り形式で「その66」まで合計515頁を執筆いただいた阿部さん渾身の力作です。

阿部さんは、あと2回分、dbx とセミプロ用マルチトラック録音機を執筆のご意向でした。TASCAM と FOSTEX でパーソナルレコーディング機器やガレージスタジオの道を拓いた阿部さんに是非とも書き残していただきかったと悔やまれます。

阿部 美春（あべ よしはる）さん（1931年～2013年）のご経歴



磁気録音との関わりはDENON(1951年)の頃からで、以来半世紀、専ら業務用とHi-Fi用機器の開発畑を歩く。DENON、YAMAHA を経て1957年、TEAC 設立に参加、ステレオテープデッキ、ステレオカセットデッキ等の開発に着手、テープステレオ時代の基礎を築く。

1971年からは音楽家用MTR（マルチトラックレコーダー、TASCAM ブランド）とミキサーの開発に着手、今日のパーソナルMTR（通称パソレコ）の基礎を作る。1981年FOSTEX に転じ、録音機器部門を新設、パソレコの普及に努める。さらに1981年、主にカセット用テストテープを製造、販売するABEX（現ALMEDIO）の設立に参加。TEAC では取締役オーディオ技術部長、同特機（TASCAM ）常務取締役他、FOSTEX では副社長(1991年退職)など歴任。

1958年頃から磁気録音関係の標準化活動に参加し、EIAJ、JIS、AES、IEC など、各委員会幹事、委員長など歴任、1979年AES フェロー、1989年通産大臣賞、1994年藍綬褒章、1998年EIAJ 功労賞。2008年に磁気録音技術への貢献により日本オーディオ協会賞を受賞。

主な著書としてはテープレコーダ、(1969年編著、NHK 出版)、録音のテクニック(1974年共著、同)、カセットデッキ(1980年著、同)他。2000年から専ら執筆活動で2003年よりJAS ジャーナルに「国産円盤録音機物語」、「テープ録音機物語」を連載。